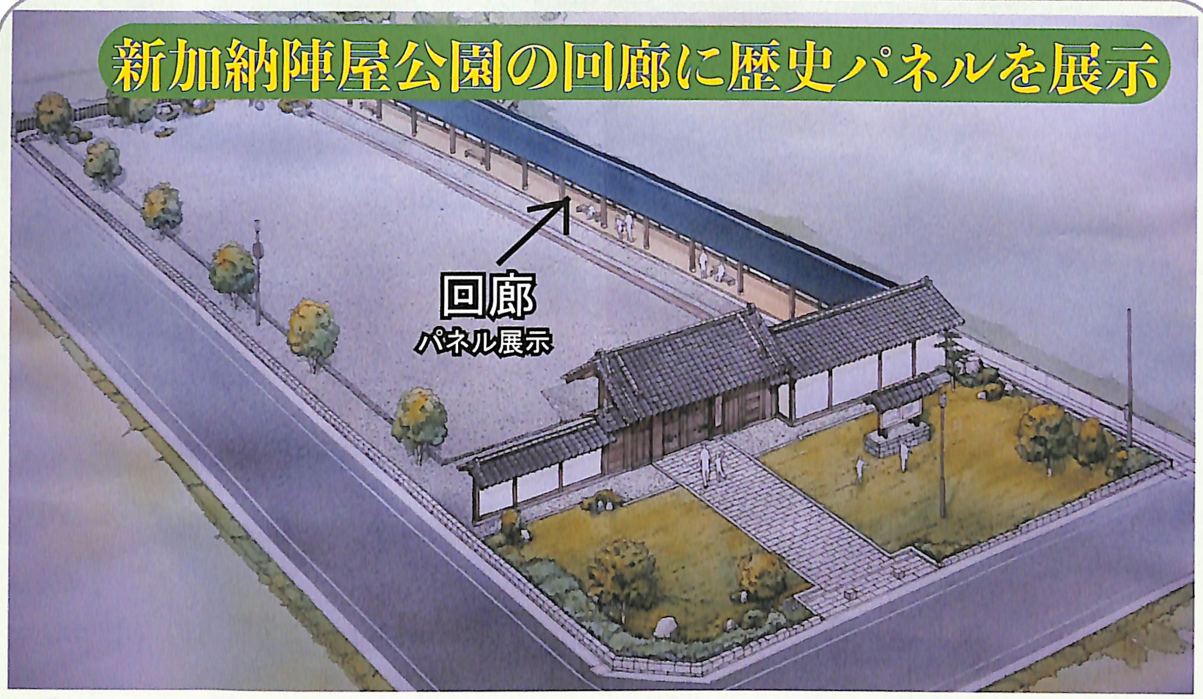
中山道間の宿 新加納 まちづくりかわら版

第19号
平成31年
3月31日発行
中山道間の宿新加納
まちづくり会
会長　小島秀俊
（かわら版編集委員会）

みんなでまちづくり
各務原市
「まちづくり活動助成金」
助成事業

新加納陣屋公園の回廊に歴史パネルを展示



新加納に古くから伝わっている文化・歴史遺産が多くの人にとっては目にする機会も少なくなり世代交代などにより序々に失われつつあります。そのため、それを伝える一つの手段として歴史パネルを作成し歴史公園に展示して皆さんにみていただきます。

現在、七つのパネルが完成しており継続して作成します。

新加納の戦い

新加納一夜城

新加納の地名のいわれ

浜見塚

雷の手

げえろ（蛙）祭り

関ヶ原の戦いと坪内氏

二月二十三日（土）「新加納防犯パトロール隊の総会」を行いました。今回は第5回で記念総会となります。事業報告、計画の他「新加納歴史講座」「空き巣、車両狙いなどの犯罪状況」「市内の防犯パトロール紹介ビデオ」の講習会を行いました。午後から第二部として各務原市消防音楽隊による演奏会を行いました。多くの地区住民も参加して、ふれあいセンターに音楽が響きわたり皆さん心地よい時を過ごすことができました。

十一月十八日（日）「新加納立場巡りと地元林本店の銘酒の試飲」が行われました。参加者十六名、観光課二名、ボランティアガイド二名の総勢二十人が二グループに分かれて、ケロット広場→瑞眼寺→善休寺→少林寺→今尾医院→日吉神社→林酒屋本店で酒蔵見物と試飲をしました。好天に恵まれ楽しく散策できました。

十二月二日（日）新加納の子供達に「歴史パネルによる子供勉強会」「日吉のかえる歌伝承会（各務原児童合唱団協力）」「子供達への安全伝達（安全グッズ）」を新加納まちづくり会、新加納パトロール隊の共同で新加納ふれあいセンターにて行いました。子供達は新加納にある歴史の話を興味深く聞き、大人になったらみんなに伝えてね～に元気で大きな返事が返ってきました。

寺社特集

臨済宗妙心寺派

龍慶山　少林寺

本堂と新築した庫裏

鬼瓦家紋（丸に州浜）

開山の東陽英朝は、加茂郡和地の出身で土岐氏の出である。英朝は五十二才で丹波の竜興寺を振り出しに、大徳寺・妙心寺・尾張の瑞泉寺の住職を得て、当地に勧請される。

延元二（一三二七）年、弓削本郷（ゆげたほんごう・那加の庄のこと）が、京都大徳寺の荘園になり美濃禅寺の主流を妙心寺派が握ったこともあって、領主だった薄田祐貞が明応二年にこの新加納の地に少林寺を建立する。

東陽英朝は知識も広く、文に優れた名僧であった。永正元（一五〇四）年、七十七才で少林寺において遷化する。

寺はその後、岐阜城を攻めた織田信長の兵火を浴び、伽藍もことごとく焼失し以後衰退した。しかし徳川時代に入り、寛永年間に至って領主坪内氏が寺の旧跡を再興し體道和尚を迎えて中興の祖とする。

少林寺は、その後坪内家累代の菩提所として保護を受け、今日に至っている。傘下に多くの末寺を持つ名刹である。

開山の墓所

東陽英朝の像

ナンジャモンジャの樹

坪内氏一族の墓所

稲荷堂

住職　久司宗浩和尚
宗派　臨済宗妙心寺派
開山　東陽英朝（大道真源禅師）
開基　薄田祐貞（薄田源左衛門尉藤原祐貞）
本尊　聖観世音菩薩
並びに諸仏　地蔵菩薩　弘法大師

寺宝

- ○親鸞聖人御影　（親鸞聖人の自筆と伝えられる）
- ○稲荷堂　文化元（１８０４）年・市指定文化財
- ○東陽英朝禅師塔所・県指定史跡
- ○東陽英朝辞世偈・県の重文
- ○愚堂国師の讃のある頂相・市の重文
- ○雷の手　寛文十二（１６７１）年
- ○公案三巻・県の重文
- ○旗本坪内家富樫庶流一統墓位牌系図並びに由緒・市の重文

行事

- ・２月３日　節分大般若
- ・３月第一日曜日　玉春稲荷大祭
- ・８月１７日　盆施餓鬼
- ・８月２４日　地蔵盆

金剛山　東光寺（臨済宗妙心寺派）

東光寺は、少林寺の南西付近にあった。古くは大野村の北隅にあり当時は何宗であったかは明かでなかった。

正徳二（一七一二）年、旗本坪内定重（本家五代目）が新加納に建立し瑞微庵徳雲和尚が創建開祖となる。

明治二一（一八八八）年九月十五日に現在関市武芸川町宇多院十九に移転した。

武儀にある東光寺跡

東光寺跡石碑

新加納の民話

少林寺　雷の手

新加納の小林寺には、「雷の手」というふしぎな宝物があるんじゃと。

それは、江戸時代のある暑い日の暮れじゃった。いつもの夕立かと思ったら、地鳴りのような大きな音を立てて、雷様が新加納の東にどえらい勢いで落ちんさったと。

ところが、その雷様の上に、大きな石どうろうが倒れてきて、雷様の手がちぎれてしまったそうなしかたなく雷様は、手だけ置いて天に帰って行かれたそうじゃ。

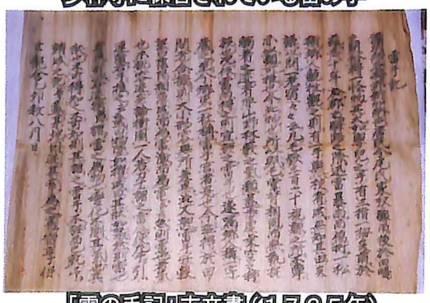
雨がやんで、少林寺の和尚様が毛むくじゃらの手を見つけて、「これは雷の手じゃかわいそうに」とていねいにとむらい、神だなにまつって、毎日お経を読んで大切にした。

それから一年もたったころ、ふしぎなことに空が晴れとるのに、すごい雷鳴がして、雷様の親子が現れて、「和尚様が雷の手を神様として、日々お詣りをしていただいたお陰で、それぞれカニカ雷神、カンカラ雷神という神の名を、天から授かることができたことがうれしくて、感謝と報告に参りました。このうえは、和尚様の縁者の方々には、どこに行かれても雷の災害を除きましょう。その目印としてわれら二人の名を記して、戸口におはり下さい。と言って、天に昇っていったと。

それからは、この雷の手を一度おがんだ人はもちろん、お寺のお守りを持っている人は、雷のわざわいから守られるそうや。さらに、日でりでみんなが困ったときには、雷の手に雨ごいをすればかならず雨が降ったということや。

ほんに、不思議な手やなあ。

少林寺に保管されている雷の手


「雷の手記」古文書（１７３５年）